

明治期の津軽地方における讃美歌の受容 —明治初期から三十年代前半まで—

Acceptance of Hymn in the Tsugaru District during the Meiji Era.

安田 寛*・北原かな子**

Hiroshi YASUDA* and Kanako KITAHARA**

論文要旨

学制発布後も遅々として進まなかった公立の唱歌教育に対し、キリスト教の宣教師達は、各地で日本人に讃美歌を教え続けた。したがって、日本人と洋楽受容の問題を考察する際、音楽取調掛と文部省が中心となった音楽教育のみではなく、日本各地で行われたキリスト宣教師達による讃美歌教育の影響を無視することはできないのである。筆者等は以上のような問題意識によって、早くからキリスト教布教が盛んに行われた津軽地方を対象として、洋楽受容に関する研究を重ねてきた。本稿は、津軽地方での讃美歌の受容、特に実際に歌った人々がどの様に受け止めたのか、という意識を窺わせる資料を紹介し、明治期の地方における洋楽受容の一端を明らかにしようとするものである。

キーワード：東奥義塾，弘前女学校，遺愛女学校，讃美歌，オルガン，洋楽受容

はじめに

津軽地方弘前における西洋音楽の本格的な受容は、メソジスト派（Methodist Episcopal Church）宣教師達の布教活動と共に広まった。私学東奥義塾教師として明治七年末に着任したイング夫妻の指導の下で、学生達は讃美歌を歌い始めたと推察され、明治八年六月に同校の学生達がイング邸において集団で洗礼を受けたときには、みなが讃美歌を歌ったことがイング夫人によって伝えられている^{注1}。

東奥義塾生達が歌い始めたことから、讃美歌は徐々に弘前市中に広がった。このとき東奥義塾生達とともにイング夫妻から讃美歌を習ったと思われる中には、成田らくのように、後に弘前女学校教師となる人物も育った^{注2}。また、明治八年に東奥義塾に設置された小学科女子部は、明治十五年に廃止となったが、同年函館に開校した遺愛女学校には、弘前から多くの女生徒達が学びに行き、その後弘前に開校した弘前女学校の教師として戻るなど、弘前と函館の交流は、明治期に長く続いた。函館遺愛女学校では盛んに讃美歌教育が行われ、弘前女学校でも、開校当初から本多（長嶺）サダのように当時としては音楽に造詣深い女性が教鞭をとっており、各

* 弘前大学教育学部音楽科教室

Department of Music, Faculty of Education, Hirosaki University

** 東北大学国際文化学会会員

Member of Tohoku University Society for International Cultural Studies

式典などでも音楽は大きな要素であった^{注3}。

筆者等は、これまでの研究において、以上のような弘前における洋楽受容の流れを明らかにしてきた。本稿では、最初にその後明らかになった東奥義塾での洋楽受容の様子を補足する。次いで、弘前及び函館における讃美歌普及の様子を述べるとともに、特に、当時の人々がその讃美歌をどの様に受け止めたかについて紹介する。

1. 東奥義塾生と讃美歌—イング夫人のオルガンと「頌歌」

東奥義塾生達が讃美歌を歌い始めたのは、明治七年末のイング夫妻の着任からまもなくの事であったと推察される。すでに別稿^{注4}において述べたように、東奥義塾生と歌唱に関しては、これまでも明治九年の明治天皇巡幸の際の天覧授業での頌歌や、さらに早い明治八年の六月六日に東奥義塾生達が集団で洗礼を受けたとき、讃美歌「Jesus, Love of My Soul」を全員で歌ったことが知られている。この東奥義塾生達の歌唱は、おそらくイング夫人の指導によるものであろうとの推測されるが、これを裏付けるかのように、明治十年6月23日にイングから洗礼を受けた長谷川朝吉は次のように述べている。

余は明治十年西南戦役に赴かんとする前日、菊池九郎、山田寅之助の二人とともにジョン・イング氏より受洗せり。此オルガンは同氏夫人の寄付せるものにて、よく二〇八番の讃美歌を練習せることを記憶す。(『弘前教会五十年略史』p.73)。

洗礼の際の讃美歌に、イング夫人であるルーシー・H. イングによるオルガンの伴奏が付いていたことがわかる。イング夫人が音楽の専門教育を受けたかどうかは不明だが、女性宣教師を多く輩出したマサチューセッツ州の名門女子校マウント・ホリオークで学んでいたことから、宣教に必要な程度の演奏技術はおそらく習得していたものと思われる。いずれにしても、東奥義塾生達は、明治七年末のイング夫妻着任の頃からすでにオルガンの音を聞く機会を持ち、明治八年六月には皆で讃美歌を歌っていたのであった。そして、東奥義塾に関して音楽との関係でもう一つ興味深いのは、明治十一年に私立中学となったときのカリキュラムのうち、予備課程に「唱歌」が入っていることである^{注5}。明治十一年カリキュラムの原案となったと推察される「私立中学教則畧」では「頌歌」となっており、おそらく最初「頌歌」として讃美歌を歌っており、後に「唱歌」に変わったと推察される。

周知の通り「唱歌」に関しては、明治五年の学制発布により教科目として設置されたものの、「当分之を欠く」とされるなど実際にはなかなか普及しなかった。後に唱歌教育普及のための中心機関となる音楽取調掛の設置が明治十二年のことであり、同掛に青森県から伝習生傍島まねが派遣されるのが明治十七年である。帰郷したまねの指導を受けた人々によって、津軽地方の公立教育で唱歌教育が始まるのも明治二十年代以降のことであった。これは津軽地方に限ったことではなく、一般に音楽取調掛で学んだ伝習生達が各地において行った唱歌教育が軌道に乗りはじめたのは、全国的にも明治二十年代に入ってからであった。また、東奥義塾と同じように男子生徒達が集まった学校であった同志社で、ドーンによって歌唱指導が開始されたのも明治八年末のことであった^{注6}。こうした状況を鑑みたとき、東奥義塾生達がイング夫人のオルガンと共に歌い始めた時期は、全国的に見ても非常に早かったことがわかる。

残念ながら東奥義塾での歌唱は長くは続かなかった。旧藩学的性格を強く有していた東奥義

塾が、保守派の人々からキリスト教との関係を非難されるようになったこと、また、財政難で明治十三年以降外国人教師の雇用が途切れたことなどが、その理由として考えられる。しかし、弘前教会では讃美歌が歌われ続けていった。日曜学校も次第に増え、そこでも讃美歌は歌われた。明治二十年代後半ともなると、弘前教会では合唱形態で歌われるようになった。例えば、東奥義塾生であった白戸良作は、次のように伝える。

私が東奥義塾に遊学したのは明治二十六年四月であった。当時弘前教会の牧師は山鹿元次郎先生で、会堂は木造の誠にお粗末なものであったが、五所川原教会の借家住居から出て来た私には、大会堂の様に思われたのであった。腰掛は二列に並び男は左側女は左側に両方とも殆ど青年で一杯であった。五六人の田舎教会から出た私には、何もかも驚異であった。第一オルガンを初めて見たというわけ、而して亦七十の男女の合唱勇壮なる哉、弘前教会！自分は此大教会の会員となるのだと密に少年時代の誇に覚えたのであった。^{注7}

ここに集う人々の中には、信仰もさることながら、その合唱に魅せられた人もいたと思われる。いずれにしても、公立学校でようやく唱歌が軌道に乗り始めた頃、弘前教会に集う人々の間では、すでに合唱が歌われるようになるなど、讃美歌は徐々に広がりつつあったのである。

2. 函館遺愛女学校生と讃美歌

函館と弘前とは、津軽海峡を挟むという地理的条件にも拘らず、特に音楽に関しては関係が深かった土地柄である。弘前の画家であった平尾魯仙が、ペリー艦隊から聞える音楽の音に耳を傾けたのも、函館でのことであった。冒頭でも述べたように、明治十五年開校の函館遺愛女学校も、開校当初は弘前から学びに行った女生徒が多く、明治十九年開校の弘前の来徳女学校、後の弘前女学校とも教師や生徒の交流が長く続いた。函館遺愛女学校では、女性宣教師が教鞭をとり、讃美歌も盛んに歌われたことから、弘前出身のみならず、青森出身で遺愛女学校で讃美歌を学んだ女生徒たちを通して、青森や弘前に讃美歌が広まった側面もあったようである。例えば、明治十八年頃から青森教会に出入りし、明治二十年に洗礼を受けたという三浦泰一郎は次のように語っている。

讃美歌は夏季休暇に函館遺愛女学校から帰省する女学生方によって輸入されたもので、沢井牧師は讃美歌は礼拝始めの中に一つと頌歌を三つあればたくさんだという超越ぶりで、一年五十三回同じ讃美歌であるので、流石幼稚時代でも若いものは満足せず、夏休みには嘸喋たる女学生の歌に陶然としてよく練習したものだ。^{注8}

単に礼拝の形式上歌があればよいということにとどまらず、より良い歌唱をもとめて讃美歌を練習した様子が伝わる。ここに出てくる沢井牧師とは、沢井弘之助牧師のことで、明治十九年から明治二十二年まで、青森教会の牧師を務めた^{注9}。したがって函館遺愛女学校生に倣って讃美歌を練習していたのは、明治二十年前後のことであったと思われる。

函館遺愛女学校草創期の明治二十年頃までの音楽の様子については、別項^{注10}で述べたので、ここでは省略する。同校ではその後も盛んに讃美歌教育を行い、特にフィラデルフィア出身の音楽教師であったミス・シンガー Florence Elton Singer が1894（明治二十七年）年に着任してか

らは、1895（明治二十八）年から年会報告書に、音楽部門（Music Department）として音楽関係の報告がなされるようになった。1895（明治二十八）年の報告書によると、シンガーは、函館の生徒達の熱心さと聡明さを喜びながら^{註11}、十三人の女生徒にオルガンを教え、学校全体の女生徒達にトニック・ソルファメソッドを教えた^{註12}。またこの頃になると同校では、予備課程の生徒や子供たちをアメリカ人女性宣教師ではなく同校の卒業生が指導するようになっていたが、その熱心な教えの結果は、子供たちの朝や夕べの祈りでのハーモニーで明らかになっていた^{註13}。シンガー達は学校での教育のほか、ミュージカルも上演し、外国人や日本人の友人達を招いている。オルガンや声楽のレッスンを受ける女生徒は徐々に増えていき^{註14}、1897（明治三十）年には、生徒全員が第四グレードのトニックソルファのレッスンを受けるほか、毎朝祈りの前に tone drill を行ったりしていた^{註15}。

しかし、一步学校を出て、町の中に行くと、音楽の状態は全く違うものであったらしい。たとえばシンガーは次のように嘆いている。

通りにおける日曜学校の歌の状態というのは、なんともひどいものです。私たちの王女会（King's Daughters）のメンバーが、毎週一時間相手をしているのは、貧しくて、ぼろをまとった、汚い、幼い子供たちです。私は、彼らに関して、なんとも救いようのない気持ちを持っています。

調子の感覚もなく、生活や声を出すことに、ハーモニーもまったくありません。彼らの中にある音楽という概念は、ただ、公立学校の教師達が歌と呼んでいる金切り声であり、熟達していない指が奏でる和楽器の、耳障りで調子の合わない音なのです。^{註16}

このように、公立の学校教育において唱歌が行われるようになってはいても、函館も一步遺愛女学校を出ると、まだまだ洋楽が普及したとは言えない状況ではあり、また、シンガー達から見ると、遺愛女学校の生徒達自身が良い音楽を聴く機会が全くないという状況下ではあったが^{註17}、明治三十五年くらいになると、遺愛女学校の生徒達は、部分的ながらメサイアを歌うほどのレベルまでになっていた。このころに同校に入学した児玉満は、後に、シンガーの指導下で歌っていた上級生の歌を次のように回想している。

十一才で入学し、寄宿舎に入りましたが、当時は八年制度で、上の組の方々とは、年令も大分ちがっており、生徒も少なく本当に家庭的で、土曜日の夜などは、みんな一緒に翌日のため、下着や足袋などの繕いをし、日曜日には着物を下からすっきり取替え、並んで会所町の教会に行ったものでした。其教会は今でも同じところにありますが、そこで、此間のクリスマスイブに、草間牧師の御厚意によるレコードコンサートがあり、ヘンデルのメサイアを全曲二時間余に亘って聞きました。其時、昔学校のあの一教場（皆さんも度々お聞きになったことのある）で上級生が歌った美しい歌が幾つも其中にあった事を知り、感慨無量でした。当時其意味はよく分かりませんでした。其美しいメロデーが天使の歌かのように、今だに耳に残っているのも不思議な位です。特にハレルヤコーラスなどの素晴らしかった事、木綿縞や緋等の着物に白袴、白足袋という装いの人達の、全心全力を打ち込んだ熱心な歌い方、神様を仰ぎ見て歌っているかがやいた顔、私共も思わず引入れられて感激したことを覚えております。私ばかりでなく級友高松ちかさん（第二遺愛幼稚園勤務）

も「本当にあれは忘れられない印象の一つです。先年ウイーン合唱団の清々しい歌声を聞いた時も、私はあの一教場の声と同じように感じて、とてもなつかしかった」と話しておりました。当時の方々の歌が、いかに純真で清らかであったか御想像出来ると思います。こうした音楽が一般に進歩していなかった五十年前、母校にはすでにミス・シンガーの下で、こんなコーラスが出来ていたのは、何と嬉しい事でしょう。其先生が「皆さん、歌う時は指3本入る位口を大きくあけてください」とよく言われた事も記憶しております。^{注18}

明治三十年代半ばにさしかかるころには、遺愛女学校の音楽の水準はかなり高くなっていたのである。そして同校で学んだ生徒達が弘前女学校の教師として着任するのも、明治三十年代になっても続いていた^{注19}。音楽に関しても、様々な影響があったものと推察される。では、弘前女学校の生徒は、讃美歌をどのように捉えていたのだろうか。

3. 弘前女学校生と讃美歌

ここでは、明治三十五年弘前女学校の本科四年生であった阿保とし^{注20}の体験を紹介する^{注21}。としは、函館に在住していたとき、日曜学校で「咲く花に」という曲を習った。一年ばかりの後、家庭の事情でふるさとに帰ったが^{注22}、ここにはキリスト教を信奉するものもなかった。寂しい時には本箱の底よりふるき歌本とり出して例の「さく花に」を歌うのが、としにとってのこよなき楽しみであった。やがて青森に住むことになったとしは、新町小学校に入学するが、そこで次のような体験をする。

四月新町なる高等小学校二年に入学しぬ。これよりぞ少は物事の道理もわかりよしあしも辨ふるやうなりぬ。ある日歴史にて天草の乱の原因を教わりて、耶蘇教の我が国体に適はざるを覚え、その教徒の不倫を怒りかねて愛せる「さく花に」も歌うを好まずなりぬ。

公立小学校で、反キリスト教的教育を受けたとしは、好きだった「咲く花に」を歌うまいと思ふほどに、影響を受けたのである。「耶蘇教の我が国体に適はざる」と考えたあたりから、日曜学校で教わった歌は好きでも、信仰の問題とはそれほど関係なかったことが窺える。しかし、ここでも一年ほど学んだ後、としは両親とともに弘前に移った。時期的に公立学校への入学が難しかったときであり、何時でも入れる私立学校があると聞いて、入学することになったのが弘前女学校であった。非常に心細い思いを抱いて、初めて学校に行った日のことを、としは次のように述べている。

さて始業の呼鈴につれて一同一室に集まりて歌へるは、思ひかけぬかの「咲く花に」のうたなりき。これに例の天草の乱の思ひれて先不快の念を起せるにかてて西洋人の独り言するよとあやしみしがさすがにおさなかりつときの覚えにてお祈りなることを知りぬ。あゝここは耶蘇なりしぞくやしき直にも帰らんかあすよりは来ぬべきかなどあらぬ思案のうちに祈りもおえて男の先生の御話に移れり。

こうして思いもかけず、懐かしい「咲く花に」に出会うことになったとしは、公立小学校でならった教育を思い出し心乱れるが、教師の話に心を開いてやがて信仰を受け入れるようになっ

た。そして、明治三十二年十二月十日に、洗礼を受けている。この阿保としのケースは、当時の女生徒の、信仰と讃美歌を歌うこととの関係、また公立小学校での教育内容の一端を伝える興味深い証言である。

また、同じく三十五年に本科四年生であった奈良ちか^{注23}は、「慈愛深き神の御手に引かれて宗教女学校に入学」^{注24}したものの、最初は信仰の話は退屈であった。しかし徐々に信仰を受け入れられるようになり、明治三十四年十一月三日^{注25}に洗礼を受けた。ちかは讃美歌について、次のように語っている。

ひそかに讃美歌集を懐にして後園の河辺に行き「世の楽しみ去り暗となるとも我が喜びこそイエス君なれ」と声を低く歌う月は明かに我れを照し風は爽かに我を慰む清き川の流れ白菊の花も皆我を慰むるが如し我芝生に跪きて祈を献げて以前の不平全く去り只感謝し平和に満ちて眠る夜の夢さえもいと安らかなり。^{注26}

ちかにとっては、讃美歌を歌うことはやすらぎであった。ちかの場合は、当初から弘前女学校がキリスト教徒による学校であると知っていたのか、阿保としほどの振幅はなかったようである。当時の人々が讃美歌について書いているものは極めて少ないが、ここに紹介した阿保とし、奈良ちかのように、讃美歌を歌うことが好きになった女性達は、少なからずいたものと考えられる。また、弘前女学校生の中には、日曜学校に参加するものも多かった。明治三十七年には、弘前教会が火災で焼失したために、同教会が再建築されるまで、日曜日の礼拝が弘前女学校で行われるようになった^{注27}。明治四十二年になると、女学校の生徒の合唱隊が、教会でのクリスマス祝賀会に参加している^{注28}。学校だけではなく、教会でも歌っていたのである。明治八年に東奥義塾生達が歌い始めた讃美歌は、函館遺愛女学校、弘前女学校、そしていうまでもなく教会を通して、広まっていったのであった。

THE CHURCH—CHILDREN AND YOUTH.

OKUNO, 4. 7a. Harmonized by LOUIS C. JACOBY, for JAS. L. ARNHEIM, Aug. 1849.

④ 第二百一十 OKUNO, 4. 7
See the shining dew drops.

教會歌童壯者

清光露滴

二百三十三

図1 『譜附 基督教聖歌集』(明治17年版)の「さくはなに」

4. アレキサンダー夫人について

本稿の最後に、明治三十年から三十二年まで弘前に滞在したメアリー・C. アレキサンダー (Mary Christine Alexander) について述べる。

メアリーは、夫であるロバート・P. アレキサンダー (Robert Percival Alexander) の東奥義塾着任に伴って弘前に来た。弘前での讃美歌受容という点からみて興味深いのは、このメアリーはボストンのニューイングランドコンセルバトリー出身であったことである。

1867年にこの音楽学校をボストンに創設したのは、イーヴン・トゥルジェーという人物であった。彼は日本の唱歌教育の成立に貢献したアメリカ側の人物では第一に挙げるべき人物で、貢献の主なものは、(1)文部省の唱歌の起源となった日本語音楽掛図の制作を支援したこと、(2)L・W・メーソンの日本への派遣と日本での活動を支援したこと、(3)メソジスト監督教会婦人外国宣教協会会長W・F・ワレン夫人の要請によって、長崎の活水女学校にコンセルバトリー卒業生A・ビングを派遣したこと、(4)文部省最初の音楽留学生幸田延をコンセルバトリーに受け入れたことであった。

こうしたことから、トゥルジェーにとって、唯一の官立の音楽学校である東京音楽学校とメソジスト監督派が支援した活水女学校の音楽科は自分の音楽学校の姉妹校も同然であった^{注29}。

熱心なメソジスト派の信者であったトゥルジェーはキリスト教宣教活動に対する音楽の貢献を高く評価していた人物で、コンセルバトリーを1883年に法人化した際に、五十人の理事を置いたが、常任理事は十四人で、彼らはいずれも各伝道団体かそれと関係の深い機関の役員であった^{注30}。

J・イングが学び、メソジスト派宣教師を日本に多く送りだしたインディアナ・アズベリー大学は、1884年からデポー大学となった。その際、音楽科を音楽学部に変更することになり、トゥルジェーが、彼が学部長をしていたボストン大学音楽学部を卒業し、当時ニューイングランドコンセルバトリーに勤めていたJ・H・ハウ (James Hamilton Howe) を学部長として送り込んだこともあった^{注31}。

ニューイングランドコンセルバトリーは海外を含めたメソジスト派の関係機関で働く音楽教師を養成する機関として機能していたのである。

以上のことからわかるように、おそらくメアリーは、弘前に来た外国人宣教師の中で、本格的な音楽教育を受けた最初の人物だった。さっそく音楽の力を発揮していたことは、1898 (明治三十一年) 年の報告書からわかる。

ミス・オットーとミセス・アレキサンダーは、音楽で非常に価値ある手助けをしています。オットーは、毎週歌唱のレッスンをして、ミセス・アレキサンダーは、私たちの公的な楽しみの場でオルガンを演奏します。^{注32}

メアリーは、弘前に来て、三つの仕事を受け持った。一つは、日曜学校の少女たちを教えることである。このメンバーのほとんどは、弘前女学校の裁縫科の生徒達だった。二つめは、市内での女性の集まりの責任者になることだった。1898 (明治三十一年) 年のメアリー自身の報告によると、1年間に五十回の会合があり、平均十八人の出席者があった。最後は、日曜日の午後の女性のためのクラスで働くことだった。主に女性達を対象に伝道活動をし、そのなかには弘前女学校の生徒も含まれていた。おそらく、メアリーに接した中には、そのオルガン演奏を

聴き、讚美歌を習った人々も多かったと思われる。もし、もっと長く、メアリーが活躍できれば、弘前の音楽の水準は、多少変わっていたかも知れない。メソジスト派宣教師の活動などがつづられているタイディングス Tidings にも、「ミセス・アレキサンダーは、音楽の教師として優れた礼拝を行った」と記されている^{注33}。しかし、明治三十二年一月十九日、火災という不慮の事故のため、メアリーは亡くなった。大変惜しまれる事故であったのである。

注

- 注1 安田寛・北原かな子「弘前における洋楽受容のはじまり」『弘前大学教育学部紀要』第79号（弘前大学教育学部，平成10年3月）参照のこと。
- 注2 安田寛・北原かな子「弘前女学校の音楽教育」『弘前大学教育学部紀要』第82号（弘前大学教育学部，平成11年10月）参照のこと。
- 注3 安田寛・北原かな子「弘前と遺愛女学校の音楽教育」『弘前大学教育学部紀要』第80号（弘前大学教育学部，平成10年10月）参照のこと。
- 注4 安田寛・北原かな子「弘前における洋楽受容のはじまり」『弘前大学教育学部紀要』第79号，弘前大学教育学部，平成10年3月。
- 注5 『東奥義塾一覧』（東奥義塾発行，明治十一年）所収のカリキュラム。なお，明治十一年に，西村茂樹が東奥義塾を視察した際の報告に当時の東奥義塾で教授していた教科目がでてくるが，ここにも「唱歌」が入っている。（『文部省第六年報』復刻版（宣文堂，昭和四十年）p.61.
- 注6 安田寛「京都と神戸ステーションの音楽教育史—アメリカン・ボード日本ミッション音楽教育史その二」『キリスト教社会問題研究』第47号（同志社大学人文科学研究所，1998年）P. 30-31.
- 注7 白戸良作「弘前時代の回顧」『弘前教会五十年畧史』p.286。この文中に「男は左側女は左側」とあるのは原文のままである。
- 注8 三浦泰一郎「青森教会思い出」（日本メソジスト青森教会代表肥後吉秀編纂『日本メソジスト青森教会略史』昭和十三年）p.40.
- 注9 日本メソジスト青森教会代表肥後吉秀編纂『日本メソジスト青森教会略史』，昭和十三年，pp.4-5.
- 注10 安田寛・北原かな子「弘前と遺愛女学校の音楽教育」『弘前大学教育学部紀要』第80号（弘前大学教育学部，平成10年10月）
- 注11 “I have been much pleased with the earnestness and diligence of the girls in this department” *Minutes of the Twelfth Session of the Woman's Annual Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan, 1895*, p.34
- 注12 “Thirteen girls have received organ lessons during the year, and the whole school has received vocal lessons by the Tonic Sol Fa method, which is so well adapted to the Japanese, teaching them pure tones in a simple and attractive manner.” *Minutes of the Twelfth Session of the Woman's Annual Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan, 1895*, p. 35.
- 注13 The younger girls, and the children in the preparatory department are faithfully taught by one of our graduate teachers, Owada O Fumi San. The results of her earnest and patient teaching are apparent in the harmony with which the children sing at morning and evening prayers.” *Minutes of the Twelfth Session of the Woman's Annual Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan, 1895*, p.35.
- 注14 翌1896年には，19人の生徒がオルガンを習い，75人の生徒が声楽のレッスンを受けている。*Minutes of the Fourteenth Session of the Woman's Annual Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan, 1897*, p. 35.
- 注15 the whole school received vocal lessons in the four graded “Sol-Fah” classes; besides a fifteen minutes practice in voice exercises, and tone drill every morning before prayer in the large school-room, where we try to get in harmony for the day.” *Minutes of the Twelfth Session of the Woman's Annual Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan, 1897*, p. 15.
- 注16 The condition of the singing in our street Sunday schools is dreadful. Poor, ragged, dirty little children whom

our King's Daughters meet for an hour every week. I have such a helpless feeling regarding them.

which the public school teachers call singing, or harsh, discordant tones made by unskillful fingers on the native instruments.

Minutes of the Twelfth Session of the Woman's Annual Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan, 1897, p. 15.

注17 “Our girls have no opportunity of hearing fine music. Orchestras, oratorios, by magnificent choirs, and even the pipe organ, are all “dreams” to them; yet they sing well, carrying the parts easily and harmoniously.” *Minutes of the Nineteenth Session of the Woman's Annual Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan, 1901-1902*, p. 28.

注18 『遺愛七十五周年史』 pp.364-5.

注19 “Four graduates from our Hakodate school have shown themselves faithful and diligent as teachers in different departments.” *Minutes of the Fifteenth Session of the Woman's Annual Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan, 1898*, p. 21.

注20 阿保としては、本稿で取り上げたように、本科四年生の時に書いた論文が残され、その中に明治十九年二月生まれと書かれているが、卒業生名簿に記載がなく、その後の進路も不明である。しかし明治三十五年三月二十九日の弘前女学校卒業式を報じた四月一日付けの東奥日報紙によると、阿保としては同校から「特待証書」を受けたと書かれている。

注21 明治三十五年度弘前女学校本科四年生論文集「玉璞」所収、阿保としての「余が信仰」より。

注22 場所は不明である。

注23 明治二十年十二月生まれ。明治三十八年に卒業している。

注24 明治三十五年度弘前女学校本科四年生論文集「玉璞」所収、奈良ちかの「余が信仰」より。

注25 『弘前教会五十年略史』では十一月四日になっている（p.38）。

注26 奈良ちか、前掲論文より。

注27 『弘前教会五十年略史』 p.44.

注28 『弘前教会五十年略史』 p.64.

注29 安田寛「晩年のトゥルジェーと日本の洋楽」『山口芸術短期大学研究紀要』第28巻（1996年）、安田寛「唱歌の起源―目賀田種太郎関係資料と唱歌掛図復元―」『山口芸術短期大学』第二九巻（1997年）参照。

注30 安田寛「L・W・メーソンの再来日計画とアメリカン・ボード日本ミッション」『キリスト教社会問題研究』第四四巻（同志社大学人文科学研究所、1995年）一一一頁以下参照。

注31 William Warren Sweet: *Indiana Asbury-Depauw University 1837-1937*, Abingdon Press, p.205.

注32 “Miss Otto and Mrs. Alexander have rendered valuable assistance in music, Miss Otto giving weekly lessons in singing, and Mrs. Alexander presiding at the organ at our public entertainments.” *Minutes of the Fifteenth Session of the Woman's Annual Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan, 1898*, p.23.

注33 “Mrs. R. P. Alexander gave excellent service as teacher of music.” *Tidings, Vol. IV-No.8*, p.97.

(2000.1.11.受理)